

ここにも魅力が



楽しさは、縫う前の布選びから始まっています。仕立てる作品に応じて生地を探します。呉服屋で買うのはもちろん、百元ショップで求めてきたり、インターネットで購入したり、知人から譲り受けたり。なかにはちりめん細工に使いたくて古布を探し回ったという人も。

最初は運針にてこずっていたけれど、少しずつ慣れてくるにつれ「作り上げた着物を自分で着たい。」「浴衣を何枚も縫ってお孫さんに着せるのが楽しみ」とせっせと針を動かしていました。



さらに大きな魅力は指導する六久保さんの存在。日本一の和裁士なのに、とても気さくで親しみやすい人柄とやさしく丁寧に教えてくださること。一人一人の希望や技術に応じて根気よく習うことができるそうです。この教室では寸法を測ったり裁断したりするのにメートル法は用いず、伝統的な尺貫法を用いるため慣れるにも時間がかかるそうですが、そんなことよりも縫うことの魅力が優っているようです。

ゆったりと心地よく流れる時間は、見学する私までもいつまでもそこにいたい気分になってくれました。

mitemite

見て見て！  
私たちの  
作品ショー



とにかく楽しい！



生徒の皆さんに、教室生となったきっかけをお聞きすると、  
「着物が好きだから」  
「自分で縫えたらいいな、と思って」  
「ふれあいセンターの案内を見て」  
「市の広報やテレビで六久保先生の紹介を見て」  
「赤レンガ商家で行われた半襟教室に参加して興味を持った」  
などと答えてくれました。

香南市内の方に交じって、東は田野町・西は仁淀川町などの遠くから参加している方もいます。多くの方は「『手拭いで浴衣を作ろう』という催しに参加して縫い物にはまった」ということでした。



この教室で何を作るかはそれぞれの思い思い。手拭いで浴衣を縫っている人もいれば、単衣の着物を仕立てている人、人形のための着物を作成中だという人、譲り受けた帯を自分用に作り直している人という風に一人一人違っていますが、異口同音に「月2回ここに来て、先生に教えてもらい一針一針縫うのが楽しい」とのことでした。

そんな生徒さんたちの間を、行ったり来たりして丁寧に教えているのが六久保先生です。「技術は二の次でいいから、とにかく和裁を楽しんでもらいたい」という六久保さんの願い通り、仲間と一緒にチクチクと縫う時間の心地よさが、私にも伝わってきました。



六久保 満子さん

## 和裁教室見学記

■担当／広報編集委員 井上桂子

「こんにちは」と声をかけると、「いらっしゃい」と笑顔で迎えてくれたのは、きりりとした単衣の着物姿の先生。『東京キモノショー』の和裁職人大賞で最高位の三ツ星★を、2018・2019と2年連続で獲得された六久保満子（ろくぼ みつこ）さんです。野市ふれあいセンターで月2回開催されている和裁教室にお邪魔して、お話を伺いました。

